

ときがわ「森林インストラクターの森」活動報告

期 日：2022年6月12日

参加者：池田、近江、田崎、藤井、横山、芳野

報告：池田

今回は「巻枯らし」の研修を兼ねて省力的な間伐作業を実施しました。

「巻枯らし」とは→幹表面の樹皮を、1周、剥いたり、傷を付け、間伐対象木を伐倒せずに立ったまま枯らし、通常の間伐と同じ効果を得ようとするものです。

横山さんの指導により、間伐する木にノコギリで刻みを入れ、ナタで皮を削り取る方法で「巻枯らし」を実施しました。特に高度な技術は必要とせず比較的簡単に出来る作業です。木は1年程度で完全枯死し、2～3年後に枝が落ちて林内は明るくなり、枯死した木は鳥類の営巣木としての機能が期待されます。今回はヒノキ6本、カツラ2本計8本に実施しました。

ヒノキ林は、少しずつ間伐が進んでおり林床植物も増えて来ていますが、間伐対象木が多く残っており引き続き間伐を進めることが当面の課題となっています。また、広葉樹の高木が多い斜面下部では湿った林内を好むコクサギが密集してきています。この場所でも枝打ち、間伐などにより光を入れる手入れが必要になってきています。

昼食後は、今後の森づくりの方向性について参加者メンバーで意見交換を行いました。

メンバーの共通意見としては「森の手入れと並行して、自然観察、環境教育などさまざまな野外レクリエーション活動のフィールドとして活用できる森づくりも志向したい」とのことで、森の中に広場的な拠点を設けたり、回廊的な道を整備する等、の案が出ました。

話し合いの途中で雷雨到来となり議論中断、慌てて解散する羽目となりましたが、今後の森づくりの方向性について有意義な話し合いが出来ました。



カツラ



フタリシズカ



コクサギ

巻枯らし作業中

